
I.O.Lデビューキャンペーンは危険が一杯！？

小林アサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・O・Lデビューキャンペーンは危険が一杯！？

【Nコード】

N7727L

【作者名】

小林アサ

【あらすじ】

ご興味を持ってくださってありがとうございます。
このお話は現在三分の一くらいまでの進行状況です。
キーワードにも書いてありますが、BLも恋愛要素も皆無ですが、美形男子五人組が事件に巻き込まれて右往左往するお話ですので、一応乙女系としております。よろしく願いいたします。

本州からほんの少しだけ離れたとある島『イオフロート』。
観光用施設が整備されてはいたが、

どうにも客足が伸びずにいたその島は、
テレビ局や研究施設更には遊園地まで整備され、生まれ変わろうと
していた。

二年間のプロモーション活動を経て、遊園地が運営開始になる当日、
記念式典へ臨もうとしていた、
イオフロートの宣伝のために結成されたグループ『I・O・L』へ
島を運営する会社『イオトラスト』の代表の乗ったヘリが、
事故にあったという報せが舞い込む。

憂いのある艶ボイスが特徴の歌手の在原君影、
爽やか高学歴イケメンお笑い芸人の西明志智、
驚異的な運動神経の活字中毒俳優の春日多喜、
天才少年の子供タレント、シュティア・L・シュレダー、
静かなる美形モデル、神鳥ルイ、

この五人が、あやしい舞台監督、あやしいパンダの着ぐるみ、あや
しいチャイナ服の女性に翻弄されながらも、
問題を乗り切って行くライトサスペンス。

（のはず。）

The show must go on - 01 - (前書き)

ええと、基本的に男の子五人組が、恋愛要素もなくわいわいやつて
いるのがメインの小説です。

The show must go on - 01 -

> i7562 — 1202 <

イラスト：洲宮エコ

【The show must go on】

01

「なんや…、えらい様子がオカシイやんか」

入り口を固める警備員にパスを見せ、セレモニー会場へ勢い良く足を踏み入れた西明志智^{さいめいしち}が急に立ち止まり、きよろきよろと会場内を見渡し始める。

野外での結婚披露宴よろしく、行楽エリア内の公園にしつらえたセレモニー会場内はざわめきながらも何故か妙に閑散としていた。

「ああ、そうだな」

続いて入って来た在原君影^{ありはら きみかげ}の目にも、厳しい表情で片耳を手で押さえながら逆の耳に携帯電話をあて喋っている礼服姿の中年男性がうつっていた。他にも、似たような格好で似たような動作をしている人々が会場内に点在しているのが見える。異様な光景だと君影は思った。

明らかに、パーティーという雰囲気ではなかった。

「…あ…」

志智と君影^{かすが たき}が立ち止まったのに合わせて、背後で同じように立ち止まった春日多喜^{かすが たき}が人差し指を中央にあるステージへ向けた。

「どうした？ 多喜」

三人の視線が、多喜に集まる。

「…マネージャー、あそこ」

言葉少なに告げると多喜は無言でさっさと歩き出してしまふ。

「おおい、多喜ちよい待ち」

すかさず志智が声をかけたが多喜は止まらない。

「とりあえず、マネージャーに状況を聞いてみましょうか。何か異変が起こっているのは確実なようですし」

君影と志智の視線の範囲外の下方向よりシュティア・L・シュレダの不機嫌な声が二人を促した。

「…シュティ、まだ怒ってるんだ？」

「こういう、段取りが悪い状況が嫌いなだけです。全く、あのマネージャーは何をやってるんですか」

シュティが君影の下方からキツイ眼差しを向けながらそう言つと、ふいつという擬音が聞こえそうな踵を返したので怒ってるんだな、と君影は思った。

数時間前のことである。

君影の携帯電話が鳴り出した。

そろそろ携帯が鳴る頃かなと思いつつ、リビングのテーブルの上にある苔の鉢に霧吹きをかけていた。

ちやかちやかとした音楽が流れ出す。それは、電話の向こうの相手をイメージし、君影自ら作曲したもので、彼の職業のロックミュージシャンという部分が遺憾なく発揮されていた。

「はい、おはようさんマネージャー」

「あつ…！ お、おはようござ、ございます、君影くん！」

何度もつつかえながら、勢い込んで話し出す様子がいつまで経っても物なれないな…、と苦笑を誘う。

「あつ…あのつ！ そ、そろそろ、セレモニー会場に向かう準備を…と思ひまして！」

セレモニー会場とは、数時間後に始まる、君影が参加するイベントとしては生涯の中で一番大きなイベントとなるであろう記念式典の会場のことである。

在原君影、年齢二十二歳。現在、I・O・Lプロダクションに在

籍するロックミュージシャン。

少し長めの深紅の髪、深い翡翠色の瞳、その右目の下には泣きぼくろがあり、年齢の割に艶と憂いを感じさせる青年である。

「おう、サンキュー。用意したら、他の奴らピックアップしていくわー」

性格は意外にもくだけた面倒見の良い常識人であり、嗜好にいたっては…。

『す、す、すいません、いつも！ よ…よろしくお願いします！』
いつもながら肩が凝りそうな性格だなと君影は思った。生真面目過ぎるマネージャーは緊張を解くということを知らないようだな、
とも思い苦笑を深めた。

君影は通話を終えると、苔の鉢の湿り気具合を確認する。

「お、今日もいい湿り気じゃん」

嗜好にいたっては、苔を育てるということという年齢や職業の割に少し渋めなところがあった。

君影自身、今は作詞も作曲もこなすシンガーソングライターのよ
うな仕事を請け負うことが多いのだが、元々はビジュアル系に近い
バンドを組み、その中で君影はボーカルを担当していた。ボーカリス
トの喉は湿度を必要とする、でも、機械には頼りたくない。そんな
理由が今の彼の嗜好を作り上げていた。

君影はご機嫌な素振りでシャワーへと向かう。

なんといっても、今日は晴れの舞台だ、自然とテンションが上が
ってしまうのを自分でも自覚した。

The show must go on - 01 - (後書き)

つづきます。

本州からほんの少しだけ離れたとある島…。

それが今現在の君影がいる場所だ。

一旦デビューをしたもののメジャーデビューのチャンスを掴みかけたところで活動ができなくなり、その後は、実家に帰ることをせず東京の片隅で細々とバーテンダーをしていた。あの頃からもう約二年になる。

随分と様変わりをしてしまった、景色も、環境も自分も。

君影は、自分の部屋を出てマンション内の廊下を歩いていた。

このマンションは、職住近接の考え方から隣に建っているテレビ局に付随する高級ホテルといった趣で作られている。個室ラウンジ、貸し会議室、フィットネス、来客対応…あらゆるニーズに対応できるようにになっており、プライバシーの配慮の観点から、外を歩かなくてもテレビ局はおろか、他のエリアへ行くこともできるようになっている。

ただ、意図的に外に出ない限り外の空気に触れない点が思考に閉塞感を生んでしまう。従って考えることがどうしても内に向かってしまいがちなのが難点だ。

(すっかりオカン役が定着しちゃったな…)

I・O・Lプロデュースの社長の誘いに乗って島に来てからかれこれ二年、様々なレッスンをこなしつつ、そして様々な職種の四人のタレントと一緒に一つのグループとしてプロモーション活動に勤しんでいるうちに、いつの間にか君影がまとめ役になってしまっていた。

昔だったら、メジャーデビューを控えた自分が、いくらマネージャーが頼りないからといって、他のメンバーのピックアップ…迎え

に行くことなど考えもしなかっただろう。

まあ、そんな自分が嫌いではないんだけど…とひとりごちた。

今日の段取りは、自分が三人のメンバーを拾って会場に入る、会場内で他の客に混ざって待機し、式典の時間に合わせてヘリコプターで会場まで乗り付けて来るプロダクションの社長と社長のエスコート役のメンバー一人が華々しく登場したところに舞台上で合流するという事になっている。

電話をかけてきた頼りのないマネージャーは会場での受け入れ担当だ。

君影は腕時計で時間を確認した。

「…多少早いけども、まずは、志智から拾うか…」

さいめいしち
西明志智、年齢二十歳。同じI・O・Lプロダクションに在籍するお笑いタレント。

君影は、年齢が近いせいなのか他のメンバーよりも自分と同じ目線で喋ることができる、お笑いとは思えない澄んだ蒼色の髪をした爽やかさが売りの流行のイケメン高学歴な二世タレントの顔を思い浮かべながら、若干歩みを早めた。

志智の携帯電話が鳴った。

着信画面を見るまでもなく、志智は相手が君影だと分かった。

リビングのソファーに片足を抱くように座りながら、左手で趣味のカウチポテト用にハードディスクレコーダーに録画したい番組を取捨選択していた志智は、リモコンをローテーブルの上に置くと代わりに携帯電話を取り上げた。

あの世話焼きロックミュージシャンは、志智のイメージで作ったという着メロをご丁寧にも君影自身で使うだけではなく志智にもメールでよこしていたからだ。意外とキツチリ志智好みに作られていたのですっかり志智も君影からの着信音に使ってしまっていた。

『しーちーくん、あゝそびーましょー』

通話ボタンを押すなり、地を這うような声で君影が喋った。一瞬、

通話終了ボタンを押してもいいかなと志智は思ったが、用件は分かっていたので会話に応じる。

（漫画の読み過ぎだ、漫画の）

「すまん、おっちゃん今日は忙しゅうて、遊びにいかれへんのや、帰ってくれる？」

『なんだそれ、ノリ悪いな』

「ノリ悪いも何も、そっちこそいきなり気持ち悪いっちゅーの。何やのもう、今どこにおるん？」

『玄関』

「どこの？」

『お前んちの』

志智はリビングの壁掛け時計を見た。

「早過ぎるわボケ！！」

君影は予定の時間より30分以上早かった。

そこからの志智の行動は早かった。

通話を切らず無言のままダッシュで玄関まで駆けて行き玄関のドアを勢い良く大きく開いた。自分が驚かされたから、意表について驚かそうという意図で、もちろん、玄関のドアの向こうの君影に当てるつもりだ。

「うわっと！ おまつ……！ 何すんだよあぶねーだろこの七輪野郎！」

携帯電話を耳に当てながら寸でところで君影は後ろへ飛び退いた。

「なんだ？ 人を練炭炊く道具みたいに言うなや、この老人系超朝型野郎！ ちったー人の迷惑考えろっちゅーの」

互いに憎まれ口を叩き合いながらも、志智は「まあ、入っとけば？」と君影を室内へと促し、君影もまた勝手知ったる他人の家とった風情でリビングに置かれたソファへと腰を下ろした。

「ちよ、そこで待っとけよ？」

志智はというと、リビングのソファへは腰を下ろさず出かける用

意をするためにベッドルームへ向かう。

「何か適当にビデオ見てもいいか？」

「ええよ、勝手に何か見てくつろいどいて」

君影の声が背中から追いかけて来たので、志智は振り向かず片手を振りつつ答えた。

きっちり三十分使って用意を済ませた志智はリビングに戻って君影に聞いた。

「次は誰んどこに行くん？」

「寝坊助なガキンちよ。…にしても遅かったな」

「な〜に〜が〜？」

ぴきつとこめかみに青筋を浮かべながら一音一音間延びさせて志智は答えた。もちろん、君影の意図は分かっている。

予定時間より早く来すぎる方が悪いのだ。

「用ゝ意がゝ」

君影も志智と同じ要領で答える。

「仕方ない、おれ、お洒落さんだもん」

悪びれずさらつと志智は答えた。確かに、志智の服装は雑誌に出てくるようなアイテムで構成されていた。

というか、日頃「シイラはオレのお母さん！」と言ってはばからない、シイラデザインのお気に入りの蒼系アイテムで上から下までばっちりキメているつもりだ。

「そっか、次は多喜かあ」

寝坊助なガキンちよという表現で、志智は次に迎えに行くのが春日多喜だということを察した。

時間がかかりそうだなあ、と志智は思った。

「おれ、多喜の後に呼びに来て貰っても良かったんじゃない？ おれ車で待つてようかなあ」

「時間のかからなさそうな仕事は先に片付けて、時間がかかりそうな方へ時間を割くのが基本だろ。すぐ近くなんだから一緒に来いよ」
そういうことか？ と首を傾げた志智に、君影はにやりと笑った。

「旅は道連れ世は情けつてな」

「はあ？ 道連れって素直に言えばええやん」

むしろ、一蓮托生なんだな…と志智は肩を落とした。

I・O・Lプロダクション所属のタレントは、この島の芸能エリアと呼ばれる地域の一画にあるマンションの中に全員が部屋を持っている。

つまり、君影も志智もこれから迎えに行く多喜、それからもう一人も同じマンション内に住んでいるため、迎えに行く作業はとても楽だった。

「多喜もさあ、朝早くから身体鍛え始めるのはええんやけど、普通の人の活動時間になると寝ちゃうっていう癖、あれ、いい加減直さないとヤバイよな」

いつか、大きな遅刻の元になるって、と、志智が、頭の後ろで腕を組みながら言う。

「お前の趣味の夜中のカウチポットと、どっちが遅刻する原因になるかって考えたことあるか？」

君影は、他人の振り見て我が振り直せだ、と冷たく応じる。

「まだ遅刻してないってば、おれ。ちゃんと加減してるやん」

さすが春日多喜、たき年齢十九歳。やはりI・O・Lプロダクション所属の俳優。活字中毒の気がある大人しい気性であるにも関わらず、化け物じみた運動能力を持つ寡黙な青年。寡黙とは言っても、ストイックな寡黙さではなく何も考えていないのではないかと思えるようなぼーっとしたところがあるのだ。

化け物じみた運動能力は、天性の資質だけでまかなっているわけではないようで夜が明ける頃から外に出て行く。そのため、普通の人が朝ご飯を食べるような時間は多喜は熟睡中ということがよくある。

「多喜、起きてるかなあ」

志智はもう一度天井をみながら言った。

寝てたらどうやって起こしたらいいんだろう？　という言外の疑問を君影は察した。

さて、この島は、観光開発されていたものを客足が伸びなかったため開発を行った会社が倒産、そこを、二束三文というには莫大な費用だと思うが、朱鷺羽グループという元財閥のご令嬢が幼い頃に彼女の祖父に頼んで島を丸ごと二束三文で買ってもらい、自分の好きなように再開発を行った。

その、ご令嬢というのは、君影の目から見ると良く言えばアグレッシブな女性で、悪く言えば自分至上主義の女王様…。そんなお嬢様がこの島を開発するとどうなるのか？

結構まとまな開発内容だった。

島をだいたい「観光エリア」「行楽エリア」「芸能エリア」「学術研究エリア」と四つ、それぞれにテーマを持たせ分割した。

分割するだけでなくそれぞれ相互に連動させた。

芸能エリアは学術研究エリアでの成果を番組制作をし注目を集め資金調達に一役買い、学術研究エリアは島のインフラ整備を研究して、他のエリアでどういう結果になったかのフィードバックを得る、研究成果はそのまま観光資源やインフラへと流用、そんな風に全てが連動し島一つで完結するようにお嬢様の気のむくままに好みのデザインで作り上げられた。

君影たちが所属するI・O・Lプロダクションというのは、その芸能エリアで制作される番組に出演するタレントのマネージメントを行う会社となっている。

今から二年前、歌手、お笑い芸人、俳優、子供タレント、モデル… おおよそ人が興味を持つと思われる分野のタレントを一人ずつ集め宣伝グループを結成させた。お嬢様のスカウトや縁故によって集められた君影たちは、この島へ本州から人を集めるための宣伝活動の役割を担うことになった。

年齢も職業も更には人種までもばらばらなグループで、最初はどうなることかと思ったが、まあ、二年の間にアイドルグループと呼んで差し支えない程度にはなんとか形になってきた、と君影は評価している。

案の定、多喜は寝ていた。

多喜の携帯電話が鳴っている。

…ような気がする、と多喜はうつすらと思った。

着信音は何かくぐもった感じに聞こえる、そしてとても小さい。身体に触れている訳ではないのだがかすかに振動を感じる。

「……………」

なんでだろう。

覚醒しきっていない脳みそは積極的に情報を仕入れにはいかないらしい。

なんでだろう。

二回目にそう思ったとき。

また、くぐもった音で遠くの方から鉄扉を開閉する音が聞こえた。

…ような気がする。

「なんや、合鍵持つてんなら最初から言えっちゅーの！ 十五分損したわ！」

「自力で起きれるならそれにこしたことはねーだろ！ いちいちうつせーな！」

どすどすぎやあぎやあと賑やかな声が近づいて来た。

お迎えの時間か…と多喜は理解した。

「多喜ー！ どこだー？」

「いないんか？」

（あ、そうか、今日は式典の日だっけ…）

多喜はなんとなく状況を理解した。

がちゃっと部屋のドアが開かれる。

「うわっ、地震か？」

「雪崩れとる…本が…」

口々に君影と志智が叫んだのを聞いて本格的に自分の置かれている状況を理解した多喜は、身体を動かした。

「あ！ 多喜」

「ちよ、どうしたん！？」

多喜は本の山に埋もれていたのだった。

身体を少し動かしたことによって、自分の身体の上の本が滑り落ちてあらわになったのを感じた。

その瞬間、襟首を掴まれた。

「よつす寝坊助、行くぞ」

至近距離から君影が言う。

こくりと多喜は頷いた。

「ちよ、君くんそのまま引きずってく気！？」

慌てたような志智の声がした。

楽でいいかな、と多喜は思っていた。

05

「なんで、あんなことになったんだ？」

「なんで、本があんなに大量にあったん？」

「なんで、パンダ？」

同じだったのは最初の三文字だけだった。

まったく同じタイミングで同じ始まり方をしたのだったが、まったく話が噛み合なかった。

「……」

「……」

「……」

無言で立ち止まる三人。

君影は掴んでいた多喜の襟首をようやくこの時になって離れた。

お迎え行脚の一行は、もう一人のメンバーを迎えに行く為にマンションと地下同士で繋がっているテレビ局の建物に来ていた。

君影と志智は進行方向を向いている、引きずられていた多喜は、進行方向とは逆を向いている。

各々の思いが交錯する沈黙を経て、何を誰の疑問を優先させるかを吟味した結果、君影と志智はくるりと、多喜の方へ向き直った。

「なにが、パンダ？」

今度は異口同音になることができた。

「……もういない、着ぐるみ」

一瞬だけ、パンダの着ぐるみがいた。多喜の目にはそううつったようだ。

「ふーん。まあ、ここは局内だし、パンダの着ぐるみの一匹や二匹いても、そんなにおかしくはないよな」

多喜が見ている方向へ同じように君影も視線を向けながら感想を

もらす。

君影の目にうつっているのは、何の変哲もないただの殺風景な白い大理石風のタイルが敷き詰めてある廊下だけだ。そして人っ子一人いない。

「追いかけてみようか？」

「止めなさい」

多喜が聞き、君影が答える。

その様子を傍らで見ていた志智は飼い犬と飼い主の会話のようだな…と思った。飼い犬が喋ることができたなら、という前提での話だが。

「で、結局あの大量の本はなんだったわけ？」

志智が聞いた。

人が埋まるほどの本を部屋に持っていたのにも驚きだが、今日この日に多喜は一体何をしようとしていたのだろうか気になって仕方がなかったのだ。

「…ああ」

聞かれた多喜は話をまとめるための間を持った。

「シュティが読みたい本を探してて、見つけたところで安心して、寝た。本が大量にあるのは、普段から…？」

「つまり、普段から多喜のあの部屋は本で埋め尽くされていて、たまたま、シュティに頼まれた本を探したら、眠くなって雪崩を起こさせてしまったと」

色々条件が重なったのだと、そういうことらしい。

「でもさ、多喜。お前、住む部屋とは別に図書室持つてへんかったっけ？」

志智は疑問を口にした。

この島の観光大使役のこのグループは、普段撮影やなんだかんだと島に拘束されてしまう。いや、むしろ島から外に出る方が少ない。大きな視野で見ると島に軟禁されているも同然、ということ。で生活に関する福利厚生はかなり手厚くされている。

自分の住む部屋以外に、自分の趣味を満喫できる部屋というものが一人一部屋用意されているのだ。

君影は音楽を満喫できる部屋を、志智はミニシアターを、多喜は図書室をそれぞれクエストしあてがわれている。

趣味のものは大概その部屋に全部収まってしまっているので、逆に生活スペースにはそれほど趣味のものが散乱したりはしない。

「手狭になった」

多喜は完結に答えた。

「ただ文字ホリックなんや……」

啞然として答える志智。

「……そこは、英語変換しなくていいと思うけど」

「ああ！ そうね！！」

（多喜にツッコまれた！！！！）

「置いて行くぞ七輪」

10メートルほど先から君影に声をかけられるまで志智は呆然と立ちすくんでいた。

「だっかっらっ！ おれを練炭炊く道具と一緒に発音すんのはやめい！」

「段取り八分って言葉知ってますか？」

少年の澄んだ声が比較的大きな声で廊下に明るく響いた。

もう、目の前の角を曲がれば目的地、というところで、君影、志智、多喜の三人はピタッと歩みを止めた。

「こええ！ 絶対白人の皮を被った日本人だよシュティ…」

「なんとという小姑や…」

「機嫌悪そう…」

お迎えもあと一人を残すところになって、起きている人間を拾いに行くだけの簡単な作業のつもりだった三人は、予想外に入るタイミングの難しそうな場面に行きあってしまった。

シュティア・L・シュレダー、年齢十四歳。同じくI・O・L・プロダクションに在籍する子供タレント。

通称シュティ。ふんわりくせ毛の金髪に大きな碧眼を持つ壁画の天使のような顔立ちの少年なのだが、彼は本来なら国の研究機関にいないかならないほど明晰な頭脳の持ち主で、ちょっとした家の事情があり、ここ日本の僻地でタレントとして活動している。

「シュティが並みの日本人よか流暢に日本語喋るのは今に始まったことじゃないやん君くん何いってんの」

志智が最初に目の前の角を曲がったら見えるであろう光景から目をそらした。緊張に耐えられなかったのだ。

「この間、シュティの兄さんが『ドリフは日本のコメディアンの真骨頂〜！』って叫んでた…ような気がする」

続いて多喜も、志智の尻馬に意図的に乗る。

「ああ、そういえば、あいつの家の執事も日本人だしな〜。『志村』って名前じゃなかったっけ、ケンさんケンさんって呼んでる奴」

問題から逃げては駄目だ！ と君影の理性は叫んでいたが、君影も結局現実逃避の脱線に乗った。

「あゝそういえば…、ヒデミさん志村って苗字だったかも」

多喜が、シュティの家の執事の下の名前をさらっと出す。シュレダー家はイギリス貴族に名を連ねる家系で、シュティ自身、教育は兄の意向でアメリカで受けていたが、純粹にイギリス人だった。

「ヒデミ？ 志村さんケンじゃないのか？」

「ちょ、君くん今まで知らなかったん！？ 二年も一緒にいて」

志智は爆笑しそうになった自分の口を慌てて両手で押さえる。

「志村にケンさんじゃあ、あまりにもできすぎやろ」。志村さん、志村って苗字だったからシュティン家に雇われてんのや。親代わりのジョシアが親日家過ぎたのがシュティの不幸の始まりやな」

口元を押さえ、必死に笑いをこらえながら志智は説明をした。

「俺、ずっと志村さんはケンさんだと思って疑ってなかった！」

あまりの衝撃に君影は三十秒ほど固まった。

「いや、シュティの家の話はどうでもいいんだよ…。負けるな俺。

シュティが白人の皮を被った日本人だろうが、執事が志村だろうがそんなことはどうでもいい」

脱線が本格的になる寸前で、君影は立ち直った。「問題は、誰がどうやって割り込むかだ」君影は真面目にそう続けた。

「君くんさあ、お迎え係なんだから、ちゃっちゃんとシュティに電話しちゃって？」

速攻で志智に一蹴されてしまった。

正直なところ、シュティはともかく相手をフォローするために出て行くのが嫌だったのだ。シュティという少年は、貴族出身だけにやたらとプライドが高い上にIQも高いそして口も達者だ。しかし、それでも理不尽に相手を責めたりはしない。相手によほど腹を据えかねた、ということなのだろう、そういう相手を弁護しつつシュティから引きはがすのは、労力がかかる。

「おや、皆さんおはようございます、こんなところでコソコソと何

をやっていたんですか？」
ところが、目の前の角から、シュティ本人がやって来たのだった。

目の前に現れた少年、シュティはニコニコと笑っていた。
瞳以外は。

「シュティ、一体何でそんなに…」

怒っているんだ？ 君影が最後まで言い終わらないうちに、シュティがお手洗いに行つてきます、と言つて三人の前を通り過ぎた。シュティがトイレへ消えた後、また、目の前の角から大柄な中年男性がきよろきよろと何かを捜すような表情でこちらへ向かつて来た。

見たことのない顔だな、と君影は思った。

「あ、おはようございます、シュティくんはこっちに来た？」

その人は言いながら歩きながら頭を下げた。

つられて三人も、おはようございます、と頭を下げる。

「お手洗いに行きましたよ」

「そうですか」

自分たちが三人ずらつと並んでいるせいなのか、居心地が悪そうにその男性は頭を掻くと愛想笑いを浮かべた。

「聞いていたんだろ？ 済まないね、怒らせてしまったようだね。」

彼は、プライドが高いね」

はははつとその人は乾いた笑いを後に続かせた。

実を言うと、最初のシュティの一言以外は全く聞いていなかった。「さあ、あまり聞こえませんでしたよー、オレたち今来たところなんですよね。すみませんね、プライドが高いのも商売のうちなんで」「そうなんだ？ まあ、あんまり若いうちから甘やかすような環境に置いちゃいかんよ」

諭すような、それでいて上から目線の大人風を吹かすような言い

方だと感じた。

意外にも、多喜が一瞬空気を変えたのを君影は察した。

相手の男性のいい分に不服があるということらしい。

「まあまあまあ、制作側も大変ですよー、上の許可をとらなきゃいけない、タレントのご機嫌取りもしなきゃいけない、視聴率もとらなきゃいけないでホント苦労しますよねー」

なんとなく雲行きがあやしくなってきたのを感じて、志智がとりなすような口調で割って入った。

「まあ、今日はね、この島の大事な日なんで、その日に免じてこの辺でシュティ貰ってっちゃってもいいっすかね？ オレたちお迎え係なんすよ」

志智はニコニコと話を続ける。まるで、大げさなテレビ局の関係者のような口ぶりなのが、笑いのネタのようで少し滑稽だと君影は思った。

「ああ、そういえばそうだね、聞いてるよ。入り時間に合わせて迎えが来るって、それ君たちだったんだ。マネージャーが来るのかと思ってたよ」

「あはは、マネージャーは他にも仕事があつて大忙しなんですよ。自分たちができることは自分たちでやっていかないとね、ダメでしょ？ 昨今のタレント事情は特に」

何が昨今のタレント事情は特になのだからさっぱり君影には分からなかったが、相手は志智のいい分に大いに納得したようだった。

「さすが志智くんだね、業界分かってるね。お父さんがあのお笑い界の重鎮だからアレなのかな」

やはり、何がアレなのかさっぱり想像がつかなかった君影だったが、相手の機嫌が良くなったのはなんとなく分かったので、シュティがトイレから出て来たのをそのまま連れて行く許可を取った。

笑顔で見送り、相手が元来た道に戻っていったのを確認した志智は、急に真面目な顔になり、ポツリと言った。

「なんか、変やな」

「ん？ 何が？」

「あの男、なんでこんな所におるん？」

「へ？ 知り合い？」

「いや、全然知り合いでもなんでもないんやけど、あいつ、ちよつと前に問題になったヤラセ番組のプロデューサーやないか……。それが、なんでシュティが出演するような番組作つとるんや。しかも」

「なんで、この式典があるような日に打ち合わせをわざわざ組んでんのやろう？」

君影は、確かにその疑問は自分も思っていたな、と思った。

こんな時に打ち合わせを組まなければいけないほど、段取りが悪のような番組制作は、やはり、シュティの機嫌を悪くしてしまうのかもしれないな、とも思った。

08

(1・1・2・3・5・8・13…)

シュティはいらだちを押さえる為に数を数えていた。

フィボナッチ数列である。

この数列であることに意味はない、何でも良かったのだ、素数だろうが、二進数だろうが、一瞬でも頭のなかで変換をする作業のものだっただなんでも良かった。

が、それほど功を奏してもいなかった。

怒りに固執することは愚かだ。それは理解している。しかし…。

「ムカつく！ あのプロデューサー！」

声を出してシュティは、トイレの洗面の水でしゃばしゃと顔を洗った。

最初にマネージャーから打ち合わせの話を聞いた時に断れば良かったとシュティは思った。

内容は決まっていらない、撮影スケジュールは迫っている、そんな状態で、シュティを呼んで、アイディアを出せ、意見が聞きたいと言って来た。

せめて、完結している台本が、いくつか案があるならば、それを一枚にまとめた企画書を持ってこいといいたい。

それもない、あれもない、シュティくんはどう思うか？

何も意見はない。

じゃあ、提案があるか？

こんな感じのいかがでしょう？

それは子供に分かるかなあ？ 君は高い所から物を見てるね。

じゃあ、これはどうでしょう？

それはちよつとありきたりだね、天才君も意外と平凡なんだね。

じゃあ、ボクは不要なようなので、帰りましょうか？ それとも、何かお手伝いでもしましょうか、今日の会議は何をどこまで決めるのでしょうか？

今日は、そうだね、適当に。

.....。

日本人は、礼儀と段取りと季節を愛する国民性があると思っていますが、違ったようです、兄さん。

そこまで、一気に思い返すと、一度ため息をつき、トイレのドアを開けて外へ出た。

「あ、シュティ」

多喜と目があつた。トイレのドアの目の前に居たのでシュティはびっくりしてしまい無言で見上げる。

彼は、どうも起き抜けをつれてこられたらしく、茶色の柔らかそうな髪が少し重力に逆らっている。来ている服も、いつも通りの服装だ。

「はい、これ、渡そうと思って」

目の前に、一冊の文庫本が差し出された。

薄いオレンジの紙に「天文対話」と、表紙に感じて印刷されている。

シュティが日本語で是非本で見たいと思っていた本だ。絶版になったと聞いていたが、やはり多喜のそこにはあつたようだ。

「ありがとうございます！」

シュティはちよつとうれしくなつて、笑顔で答えた。

「じゃ、いくぞー。忘れものないな？」

頭の上の方で、君影の声が聞こえた。

「はい、何も持って来ていません」

シュティは答えて、歩きだした。

木立の間を君影たちの乗った電気自動車が滑るように走って行く。
行き先は行楽エリアの公園だ。

「今日は、ロケバスで着替えとメイクで、会場は野外設営だから、
スタッフパスを持ち歩くようにってお達しだ、志智ダッシュボード
の中の奴配ってくれ」

君影に言われて、助手席の志智は自分の目の前のダッシュボード
から取り出し、多喜とシュティに配った。

君影は運転中なので、志智が君影の分も預かる。

シュティにパスを手渡す時に、志智はふと思ったことをシュティ
に聞いてみた。

「なあ、シュティ。さっきの打ち合わせって、ちゃんとマネージャー
ー経由で来た仕事なん？」

パスを受け取りながら、シュティの機嫌が一気に急降下したこと
が分かった、志智に笑顔を向けてきたからだ。

「ええ、昨日の夜に、マネージャーがどうしても断れなくてって電
話かけてきましたよ。その点が、不審といえ不審なんですけれど
も、気の弱いマネージャーのことですし、押しの強い人に負けてし
まったんでしょうね」

シュティは答えながら、車の窓の外を眺める。

「そっか、マネージャー経由ってことは、ちゃんと事務所通してん
やな」

志智は、独り言のように言いながら前に向き直った。

「この島の局内にいるってこと自体、ちゃんとした筋を通してるっ
てことじゃねーの？」

君影は、志智が何をそんなに気にしてるのか分からないといった

風情で話に割り込んで来た。

「そうなんや、それが腑に落ちんのや。なんで、あんな奴をこの島に入れたんだろうつて気になってな」

この島は大きな転機を迎えようとしている。

レジャー施設、研究施設などをクリーンエネルギーで運用し、その實際を、訪れた客が体験する。もちろん、もう何年も前から、研究所やテレビ放送のシステムは運用されている、だが、今日からはそこにレジャー施設の営業が始まる。島が目指した最終形態になるのだ。全国の注目を集めている中、問題を抱えている要因は少ない方がよい。そんな時期に、テレビ業界を追われたような人物を島に入れる愚を、誰が犯すというのだろう。

「事務所の承認がない打ち合わせはボクはしないですけれども」
シュティが、話し始めた。

「今日の打ち合わせの内容は、とてもじゃないけど、打ち合わせと呼べるものじゃなかったですよ、企画自体の案を出す程度のものでした。しかし、撮影は来週からだそうです。多分、あの企画は撮影が実際に始めることができないでしょうね」

意味がない、意味が分からなくて、振り回された徒労だけがシュティに残った。

何でこういうことになったのかすら、自分に情報がないがために追求できず、膿みのように溜まったストレスが自然消滅するのをシュティの中で待っている。

「志智が言う通り、何か変なところはあるけど、情報がないものを気にしていても仕方ないからな、とりあえず、後でな」

君影は電気自動車を停車させた。

「さ、行くぞ」

君影は他の三人を促し、車をロックする。

「へいへーい」

「うす」

「仕方ないな、あーあ」

口々に返事をして、君影、志智、多喜、シュティの4人はロケバスへ向かった。

「すごい君影くん時間ぴったりじゃない！」

ロケバスに着いた四人は二人のヘアメイクと一人の衣装担当のスタッフに迎え入れられた。

「そりやもう、慣れてますから」

三人のスタッフの拍手に君影は片手を上げて応える。

君影に続いて、志智、多喜、シュティと入っていく。

「さあ、一気に仕上げるわよー！」

最初に声をかけた女性スタッフがそう声を上げると、ロケバスの中は戦場のような空気が生まれた。

「はい、多喜くん！ 芸能人の顔になって！」

多喜は、化粧水のパッティングでびしびしと叩かれた。

「シュティくんは今日はちょっと険があるわよ！ はーい天使顔！」
シュティは強制的に顔をマッサージをされた。

「大きい二人組は先に着替えて！」

多喜と一つしか変わらないんやけど！ と不満を漏らしつつ志智は着替えに入る。

「パワフルだねー、呉羽さん、いつもながら」

そう君影は衣装担当のスタッフの男性に声をかけると、その男性は「肉食系女子って奴ですかね」と苦笑した。

「馬刺に焼酎とか似合いそうやもんな呉羽さん」

志智もそれに乗っかると。

「それ、私の好物よ！」

呉羽さんと呼ばれているヘアメイクの女性はそう応えると豪快に笑った。

ロケバス内に和やかな笑いが起こっている頃、E・O・Lプロデューサーの観光大使メンバー最後の一人、神鳥ルイの周囲は緊迫した空気に包まれていた。

「お嬢様！ 申し訳ありません、操縦不能です！」

島の上空約700メートルでパイロットの絶望的な声を聞いてしまったのだ。

スカイダイビングを楽しむには高度が足りないな、と反射的にルイは思った。

いやいや、高度が100メートル以上あるのだからパイロットに何とか軟着陸に頑張ってもらうのが筋なのだろう。島にさえ近づかなければ、回りは海ばかりだ。

ルイと一緒にヘリコプターに乗っていたお嬢様と呼ばれた女性は、その報告に形の良い鼻を鳴らして口をゆがめただけで、取り乱す気配はない。

胆のすわり方が尋常ではないのが、朱鷺羽静香が朱鷺羽静香たるゆえンである、とでもいうかのような落ち着きぶり、むしろ、パイロットの方が取り乱してしまっている。操縦桿をがちゃがちゃと動かし、「どうしたらいいんだ！」といった内容の言葉を叫びながら慌てふためいていた。

これでは、助かるものも助からない。

困ったな、とルイが思った時、予告なく静香が自分のシートベルトを外しにかかった。

「ルイ、落ちる前に行くわよ」

まるで、停車中の車から降りるかのような気軽さでルイを誘ったところが、ルイが「はい」と応える前に、今まで取り乱していたパイロットが豹変した。

「おっと、助かってもらっちゃ困るんだ」

手にはナイフを握っている。

弱ったな、とルイは思った。

静香は、しばらく無表情のままナイフを握ったパイロットをまっ

すぐに見つめていたが、やがて、大きくあでやかに笑った。

思ってもいなかった表情に「え」と虚をつかれたパイロットは、おもむろに静香が自分の脱出用パラシュートをナイフの切っ先にあて、そのまま押してくる力にのけぞってバランスを崩してしまった。ルイはその隙に、自分もシートベルトを外し、パラシュートを背負い、静香を自分の腹にくくりつけタンデムジャンプの体勢を整えた。

静香が扉を開くのを助ける。

体勢を立て直せない暗殺者のヒステリックな笑い声が後ろから聞こえる。

「そのパラシュートは開かないように細工してあるんだ、さようならだなお嬢様！」

その声を振り切るかのように、ルイは「行きます！」と声をかけ、ヘリコプターから飛び出た。

すみません、あなたを信用していなかったわけではないのですが……。

ルイは、心の中で暗殺者に豹変したパイロットに詫びた。

数秒後、パラシュートは見事に開いた。

（自分で使用するものは自分で管理、が基本的な職業なものですから……）

神鳥ルイ（かんどり るい）、年齢二十三歳。I・O・Lプロダクションに在籍するモデル。

褪せた金髪に静かなブルーグレーの瞳を持つ日仏混血のショーマデル。

趣味は、スカイダイビング。趣味が高じてインストラクターの資格も持っている。徹底した自己管理をモットーとしているため、本日も自前のパラシュートを持ち込んでいた。

「なんや…、えらい様子がオカシイやんか」
最初に戻る。

白を基調に燕尾服か学生服か何かをモチーフにした未来的なデザインの衣装へ着替え、それぞれ、メイクを施された四人は、入り口を固める警備員にパスを見せ、セレモニー会場へ勢い良く足を踏み入れた。志智が急に立ち止まり、きよろきよろと会場内を見渡す。何故か、会場の中が閑散としつつも、奇妙なざわめきに満ちていた。
「ああ、そうだな」

続いて入って来た君影も、普通、セレモニー会場というものは、式典が始まる前から人がぼつりぼつりと集まり始め、開始10分前には大体定員になっており、所定の位置へ立っているか座っているかしているものだと思っていたのだが、現在、開始15分前であるにもかかわらず着席する様子がない。

そればかりか、見つける人、見つける人ほぼ全員が厳しい表情で携帯電話でどこかと連絡をとっているようなのだ。

他の客はというと、一様に会場の入り口付近から港の方を見ている。

まるで、大きな犯罪現場か事故現場に出くわしたみたいな様子だと君影は思った。

「…あ…」

志智と君影が立ち止まったのに合わせて、背後で同じように立ち止まった多喜が人差し指を中央にあるカーテンで閉じられたステージへ向けた。

「どうした？ 多喜」

三人の視線が、多喜に集まる。

「マネージャー、あそこ」

言葉少なに告げると、多喜は無言でさっさと歩き出してしまふ。

「おおい、多喜ちよい待ち」

すかさず志智が声をかけたが、多喜は止まらない。

「とりあえず、マネージャーに状況を聞いてみましょうか。何か異変が起こっているのは確実なようですし」

君影と志智の視線の範囲外の下方より、シュティの不機嫌な声が二人を促した。

「シュティ、まだ怒ってるんだ？」

「こつこつ、段取りが悪い状況が嫌いなだけです。全く、あのマネージャーは何をやってるんですか」

シュティが君影の下方からキツイ眼差しを向けながらそう言うつぶいっという擬音が聞こえそうな踵を返したので、怒ってるんだなと君影は思った。

「沸点が低くなってるなあ」

肩をすくめながら志智はシュティを見送ると、君影へ面白い物を見たといった風情で感想をもらした。

「ちよつと息子の様子がいつもと違うからって、そんな過敏にならんでもええんちゃう？」

志智は気にすることないでえ、と君影の肩をぼんぽんとたたいて多喜とシュティの後を追った。

過敏になっている？

志智にそう指摘された君影だったが、君影自身は、珍しくシュティが不機嫌さをあらわにしていることが気にかかるのではなくて、「そうじゃなくて…」そうではなくて…、なんだろう？ 言葉にならない引っかかりを感じているのだった。

（なんだろう、なんか、変なんだよな、シュティ関連のことで、なんか変…な気がする）

喉元までその引っかかりが出かかっているのに言葉にならないもどかしさが気になって、君影は誰かとぶつかりそうになった。

「…うわつと、つとスイマセ…、パンダ？」

化粧が施された頬に、毛が一瞬もふつと当たる。

それはよほど急いでいたらしく、君影が気がついたときは、既に振り向かないと確認できないところまで遠ざかってしまっていたが、律儀に「気にするな」と後ろ手に片手を振っていた。

「パンダの着ぐるみじゃねーかよ、おい」

君影は啞然としてしばらくパンダの後ろ姿を見送ってしまった。

12

君影がマネージャーの元へたどり着いた時には、既に険悪な雰囲気
が漂っていた。

マネージャーを囲み、皆一様に眉をひそめている。

「遅れてすまん。なんだかパンダがいたぞ、会場内に」

さつき多喜が見たパンダの着ぐるみと同じだろうか？ と続けよ
うとしたのだが、「後にしてください、君影」と、シュティに遮ら
れてしまった。

「どうした、なんかあったのか？」

言いながらマネージャーを見る。

「あ…、あの、…あの」

マネージャーはたどたどしさに輪がかかった状態だった。何か問
題があったようだ。

「シヨックを受けているのは仕方ありませんが、もう一度ちゃんと
話してもらえますか？」

シュティは静かにだがいらだった口調で、マネージャーに話しか
けた。

君影は、自分がいない間にもたらされた情報をすぐにでも知りた
かったのだが、口を挟むべきではないな、と思って黙っていた。

マネージャーがこれほど動揺しているということは、自分たちに
関係ある部分で何かがあった、というのは想像に難くない。

今現在、何事もなく志智、多喜、シュティ、マネージャーがここ
にいるということは、少なくともそれ以外、機材、舞台、他の出演
者…もしくはルイとお嬢に何かあったのだとすると…。

そこまで、考えて君影ははっと会場の入り口の方角、そして、空
を見上げた。

会場に入らず、皆、何をしていたのか？ それは、お嬢とそのエスコート役のルイが乗ったヘリコプターに何かあったということなのか？

「なあシュティ、ヘリってどうやって飛んでるんだ？」

空を見上げながら、君影はシュティに聞いた。

「飛行機と同じですよ」

シュティはマネージャーから目をそらさずに答えた。

「なあ、ヘリって何で飛んでるんだ？」

君影はなおも聞く。

「簡単に言えば、ベルヌーイの定理です」

「もつと簡単に説明しろよ」

君影とシュティのやりとりが段々早くなっていく。

「翼により揚力を発生させて飛んでいます。飛行機は自らが動くことによって揚力を発生させていますが、ヘリは羽を動かして揚力を発生させているんです。シンプルな話でしょう」

シュティも無表情に答える。

「わっかんねーな、簡単に落ちるのか？」

「割と簡単に飛びますし、割と簡単に落ちます」

「どうやって？」

「揚力を失えば」

「どうやって？」

シュティがピタッと答えるのを止めた。

マネージャーから視線を外し、君影の目を見た。

「…操縦不能だそうですよ」

やっとさっきから聞きたかった回答が得られたのだが、それは最悪の想像を確定しただけだった。

「マジで？」

見つめ返した水色のビー玉のような瞳が真剣だった。

「連絡手段はありません。無線の交信も途絶えたということです。…
そうですね？」

シュティはマネージャーへ確認をとる。マネージャーは何度もうなずいた。

「なぜ、そうなったかという原因については、情報がまったくありませんし、今、その話を追求したところで事態が何か好転することもないです。」

ヘリに関して、ボクたちに何かできることはありません。ヘリのパイロットかルイの判断に期待するしかありません」

「あとは神頼みだな」

「神頼み…、そうですね、静香の強運を信じましょう」

静香、と聞いて君影は我に返った。

もし、静香が死ぬような事態になったら、死ぬにはいたらなくとも、もし、ヘリがどこかに不時着して定刻通りに式典が始められない事態になるのだとしたら…。

「まずいな、この場をどうやって収めたらいいんだ」

シュティがやっと気がついたかといった表情で君影を見た。

「その手段を考えるために、さっきからマネージャーに尋ねているんですよ」

手段を講じるために、マネージャーに尋ねる。

手段をマネージャーに尋ねる、ではないところが、こいつの恐ろしいところだ、と君影は思った。

誰かのせいにしない。

庇護されているだけの少年ではなく、自立した人間なのだと、こういう時に実感させられる。

「で、シュティは何が聞きたかったんだ？ 時間ないぞ」

「The show must go onかどうか知りたいんです」

シュティは、こめかみに人差し指をあて考える仕草をした。

「ああ、そゆこと」

志智が、納得した。

「なるほど」

多喜が、うなずいた。

ザ ショー マスト ゴー オンとシュティは言った。

君影自身もQUEENの有名な曲のタイトルになっているくらいの言葉なので意味は分かった。

ショーは続けなければいけない。一旦始まった舞台は何があっても止められない。この式典というショーを始めるのか、そして続けるのかどうか？ ということだ。

今日の式典が成功するか、失敗するかで、この島の命運が決まる。自分たちは、もう既に二年前から自主的に今日の式典のためのレールに乗っている。君影は、一度掴みかけたチャンスを逃した、二度目は逃したくない。このショーが続行可能な限りなんとしても続けたい、そう思った。

「操縦不能になっていたと判明した時には、まだプロペラは回り続けていたのかどうか聞きたいです」

シュティの中ではいくつかのシナリオができ上がっているらしい。そのシナリオの分岐点となるところが、「プロペラは回り続けていたのか」なのだろう。

「マネージャーどう？」

「…分かりません」

か細い声でマネージャーは答えた。

「分からないじゃなくて」

シュティが声は荒げはしないもののいきり立つ。なるほど、これで時間がかかっていたのか。君影は、シュティを制した。

「分からないのは分かった。じゃあ、音は？　すぐ、墜落するような話しをしていたか？」

「…していません。音は、なんだかうるさかったです」

「じゃあ、すぐには墜落しない可能性もあるってことだな？」

君影はシュティに目配せをする。

シュティは無言でうなずいた後、喋り始めた。

「通常、その状況であれば、パイロットはなんとしてでも軟着陸を試みるでしょう。ですが、静香の性格を考えると、しばらく揚力が保てる状況なのであれば、大人しく軟着陸を試み救助を待つ、という選択をするとは思えません」

「ルイも連れてるしな」

志智が言った。

パイロットが止めても、ドアを開けて出て行ってしまいそうだ、そこにいる誰もが思った。

「会場の状況から推測するに、マスコミはへりに異変があったことを既に報じているはず。なので、それを逆手にとりましょう」

「…え、でも、そんな、むちゃくちゃな。それに、もし、脱出していなかったら…」

マネージャーが口を挟んだ。

シュティはにっこりと微笑んだ。

「大丈夫ですよ、静香は」

「まあ、むしろ、自分が来たときに用意が整ってない方がキレられるよな」

君影もシュティに乗る。この仲間だったら乗り切れる、そう純粹に思った。

前はもつと自分が引っぱっていかなくてはいけない責任感で張りつめていたのにこの気楽さはなんだろうとも思った。

「そっやなあ、『アタシが死んだってやり遂げなさい！』くらいのことは言っわな」

志智もちゃかして言った。

「じゃあ、どうする?」

「サプライズで映画の撮影ということをお願いします」

「堀ちゃんちよつと話があるんすけど」

君影は、舞台袖にいた舞台監督を呼び止めた。

「よつす君影、なーんかお嬢のヘリ事故ってるんだっ…」

事故ってるんだって？ 全部言い終えない内に、君影はあわてて

堀ちゃんと呼んだ舞台監督に飛びついて口を塞いだ。

「やだなー堀ちゃん、映画の撮影やってんだってこないだ飲んだ時言っただつしよ？ 忘れたの？」

袖にいる皆も誤解しないようにね、あっははははは…。

（ああ、スゲーわざとらしいなオレ…）

君影は満面の笑みで、回りの出演者にも愛想を振りまく。

わざとらしいと分かっていても、今はそのまま押し切るしかない。

堀は君影のライブで必ず舞台監督として入ってるので、君影とは顔見知り…というか、飲み友達だった。

周囲に愛想を振りまきつつも、堀とスクラムを組むような形で肩を抱き寄せて小声だが怒鳴るように話しかける。

「ちよ、ちよ、ちよつとさあ、堀ちゃん頼みがあんだけど。お嬢事故ってるらしいんだよね」

「何、マジかよ、さつきから中継入ってんの本当の話なのか！ 全然こつちまで指示回ってこないからさ、ちよつと困ってたんだっつの」

堀も同じように喋り返す。

「オレもさ、さつき入ったから、どんな中継入ってんのか、オレ実は知んねえんだけど、でもさ、墜ちたとか言ってるねえだろ？ 多分」

「確かに言ってるねえな。で、どうすんの、止めんの？」

「いやいや、お嬢怖えからやるやる。でさ、なるべく段取り変えな

いようにやるけど、報道入っちゃってるからフォロー入れようって話になってんだ」

「まあ、暗いところでやるワケじゃねえし、なんとかすんべ。で、何、映画撮ってるんで事故ってるように見えても事故ってないでーす、とかって苦しい言い訳すんの？」

「簡単に言えばそんな感じ、志智がそれで時間稼ぎするから、その間にお嬢が多分空から降ってくるって」

「何それ、パラシュートで降りちゃうんだ？ 確実な話しなワケ？」

「シュティの予測すよ」

「あ、じゃあ了解。シュティがGO出してんならオレ乗るわ」

堀は自分の腕時計を見る。話が見えれば十分だった。舞台セットの位置の変更とトランポリン位置の変更を素早くインカムで伝達する。

「そこまで当てにしているのかよ」

「あいつとーぺんちゃんと話してみろ？ お前よりよーっぽどしつかりしてんぞ。じゃあ、両横に設置してた滑り台を面側に向けて、トランポリンを舞台の奥側に設置しといてやるから、そこにお嬢を投げてもらえ。そこ以外に降りるんだったらちゃんと降りられるだろうからオレは知らん。あゝ今からだと…予べル本べルなしで、定刻になったら志智がスタートって感じか…。通常の段取りに戻るまで何分だって？」

「十五分」

「十五分ね、了解」

「サンキュー堀ちゃん、シュティに伝えとく」

「ういうい、今度お前のおごりでよろ」

お前は一体いつシュティとちゃんと話したんだよ堀ちゃんよ…。

君影は、三十路を過ぎたまばら無精髭のおっさんと十四歳のシュティがちゃんと話しているところを想像しながら走った。

（どう考えても犯罪ちっくな絵面にしかなんねえって！ 気をつけろよおっさん…）

サファイアの瞳を持つ我が島「イオフロート」。

緑に囲まれた八角形の深い青色は、セントラルオクタヴィアン揚水発電所。

天気の良い日に空からこのセントラルオクタヴィアンの池を眺めるのがとてもお気に入りだ。

こんなに綺麗なのに、電気を作れるなんてホントにお得だわ。

セントラルオクタヴィアンは、余ってしまった電力により海水を吸い上げ、必要な時に吸い上げた水を落とすことで発電するという揚水発電所なのだが、そんなところにお得感を感じてしまう静香をシュティの兄のジョシアはいつも「日本人って無駄が嫌いだよ。二つ以上の機能がないと満足してくれないんだ」と笑う。

「そりゃそうよ、私はあたりまえなことをするために生きているわけじゃないんだから」

と、静香はジョシアの悠長な物言いを一蹴する。

一つの物が一つの機能を果たすのは当然のことであって、そこに付加価値がつかなければ静香の興味は惹かれない。

ただ生きているのであれば、虫でも植物でも持っている一つの機能だ、生きる機能以上に思考と感情を持つ人間だからこそ、一つ以上の機能を持つものに関心を持つことができる。人間が生きること自体が多機能さを求めている、と静香は思っていた。

人間の一生は短い。人間として生を全うする時間の中で精一杯たくさんのことを楽しみつくしたいのだ。

「楽しまなきゃ損だわ」

自分を殺しに来た人間に会った、その瞬間をどう生きるか、生き延びるかを考えるのも楽しかった。

今、島へ降りて行く瞬間も、島や海の綺麗さに圧倒されるのが嬉しい、この空気抵抗を感じるのが楽しい。

次に地上に降りる瞬間も、降りた後のことも、その時にどうなったのか知るのが楽しみで仕方がない。わくわくする。

一秒一秒生きていることを楽しみたい、またそれが楽しい、それが朱鷺羽静香という人間だった。

おれの芸能人生これで終わりか？

呼ベル本ベルなし、段取りなし、台本なし、全部アドリブでつてホントにむちゃくちゃなあ、本来の段取りにつなげるのも自分やし、しかも十五分必死でつないでも、もしかしたらお嬢はこないかもしれない。その時はその時で、お嬢がいないままで、進めていかなくてはならない。

The show must go onの鉄則なのだ。

一度始まった舞台は続けなくてはならない。

（ホントに無茶すぎる）

志智は、腕時計を確認する。

あと五分。

時間は刻々と迫ってくる。

なんで、こういう日にハプニングが起こっちゃうかな、普通こんな大事な日は念には念を入れて失敗のないようにするもんちゃうんか、二年も前から決まってるような式典には…。

志智は走馬灯のように二年間の道のりを振り返る。

お笑い芸人の大御所という普通の生活を送るには困るような父親を持つ環境の中、父親の影響を受けないように受けないように勉強も頑張り国立大学にも受かった、見てくれも爽やかさや清潔感に気を配って頑張ってきたにもかかわらず、いざひんなことから芸能界へ入ると、自分にはお笑い芸人の道しかなかった。しかし、朱鷺羽静香という人は、お笑い芸人だけではない道も示してくれたから誘いに乗ってみたのだ。

二年間、確にお笑いだけではないアイドルとしての仕事があり、芸能人という範疇から外れるようなレッスンもあったりはしたものの

の、結構順風満帆だと思っていた。
今日までは。

（今日コケたらなんにもならへんのや畜生）

なんとしても乗り切らなくてはならない。

「せめて、出る時になんかいい感じのジングル入れてくれよ」

ええいままよ。と踏ん切りをつけ、志智は舞台上がった。

『イオトラストプレゼンツ アメージングランド営業開始記念式典
へようこそお越し下さいました！ アメージングどつきり企画は十
分に放送してくださいましたか？』

港から公園にかけて、ところどころに配置してあるモニターが一
斉に志智の姿を映し出した。

時間になったんだとシュティは思った。

志智は、謝辞を述べながら自分の背に隠していた急ごしらえの「
どつきりでした！スイマセン！」と書かれている手持ち看板を出し
た。

シュティの回りにいた招待客や報道関係者は、そのモニターから
流れてくる言葉に一斉にとまどいの声を上げている。

『さてさて、大いに驚いてくださった皆さんの様子を見てみましょ
うー！』

モニターの中の志智はそういいながら携帯電話を操作している。

すぐさまシュティの隣にいた多喜の持つ携帯電話が振動を始めた。

多喜が通話ボタンを押す。

『港近くに我らがメンバーのシュティと多喜に一番驚いてくださっ
た皆さん取材してもらおうと思います。現場のシュティと多喜』
？』

志智がいい終わると、モニターは画面の半分が多喜の持つ携帯電話
話の画像へと切り替わった。正確にいうなら、志智の持つ携帯電話
と多喜の持つ携帯電話がテレビ通話をしている画面に切り替わった。

多喜が携帯電話のカメラでシュティを映している絵だ。

逃げやがったな志智。心の中でシュティはつぶやいた。

もう少し向こうで頑張るかと思っていたのだが、志智は挨拶が終わるや否やシュティに振ってきたからだ。

「はい！　ここはアメリカンジャングルの玄関口、ポートアインシュティンです。実に多くの人がこちらにいらっしやってますよ志智くん！　会場内は閑散としてるんじゃないでしょうか？」

もしそうだとしたら、賭けはボクの勝ちなので、志智くんに七三分けになってもらいつつ、取材を試みたいと思います」

シュティはにこやかに多喜の持つ携帯電話のカメラへと手を振った。

『ちよ、シュティなに言ってるねん！』

画面の半分の志智が聞いてないよとリアクションを起こす。

そこへ、悪い笑みを浮かべた君影がクシとワックスを持って登場した。

「ざまーみる」と思いつつも純真な笑顔を浮かべながらシュティは顔に似合わず流暢な日本語で喋り始める。

「ボクたちは二年程前から、このイオフロート島の観光大使として宣伝に努めて参りましたが、その集大成ともいべき今日は、皆さんに驚きと興奮と更に今後のアトラクションとコラボレーション予定の映画の一部になっていただくこのどつきりを計画しました。現在、上空ではイオトラスト代表の朱鷺羽静香がプリンセステンコーさながらの脱出劇を演じております。ヘリコプターからダイブした後、無事会場までたどりつけるかどうかはご覧じろ」ということで…。

あ！　今、みなさん見えましたか？　上空にパラシュートが見えます！　こちらに向かってきています！」

モニターの中の君影と志智も、え？　という表情で空を見上げる。「ボクの計算では、もうあと五分程で会場へ到着する予定ですので、こちらにいらっしやる皆さんは会場へ向かわれた方が良いかと

思われます」

シュティは「どうですか？ 感想は？」などと適当に話しかけながら、港付近にいる人間たちを会場へ誘導することに成功した。

パラシュートは見つけたとたん、どんどん近づいてくる。

数は一つ。

お嬢かルイのどちらかか？

君影はそう考えて、どきつとした。

さつき話した堀の顔が浮かんだ。

近づいてくるパラシュートをよく見ると、二人が重なっていることが分かった。

二人ともいたことにほっと安堵した。

これで、先ほど堀が言ったように、場合によっては静香を舞台奥のトランポリンに落としてもらうことができる。

目は上空のパラシュートから目が離せない。

しかし、頭の奥では、先ほどの堀とのやりとりが浮かんでいた。

舞台袖で段取りの変更を相談した時、堀はなんといったか？

「じゃあ、両横に設置してた滑り台を面側に向けて、トランポリンを舞台の奥側に設置しといてやるから、そこにお嬢を投げてもらえ」と言っただけだ。

なぜ、堀は、お嬢が投げてもらえる状況だと断言できたのか？

そう疑問に思ってしまったと、もうダメだった。

じゃあ、なぜ、トランポリンを最初から使うセットだったのか？

なぜ、配置を変えれば滑り台として機能するセットなのか？

なぜと考え出したら際限なく疑問がわいてくる。

だが、パラシュートは君影がそう考えているうちに、すぐ近くまで降りてきていた。

「舞台を通り越すかな」

いつの間にか舞台上にいたシュティが、ボソッとつぶやいていた。

シュティの言う通り、会場の入り口の手前では降りることができなかった。

「多喜、静香がトランポリンに落ちて跳ね返るのにタイミング合わせて姫抱きで拾ってきて」

シュティは更に、小声で多喜に指示を出す。

結構無茶な話だな、と君影は思った。

特に、パラシュートを目の前にしている今となつては。

「大丈夫ですよ君影、静香の衣装は特殊なライダースーツに耐ショックのパッドが入っていますから、多少の衝撃では怪我だってしません」

多喜に指示を出したついでに、シュティがニコつと君影に微笑みかける。

遠目には、喋っているようには見えないだろう。

君影は、自分がそんなに心配そうな顔をしているのだと思った、理由は、違つたのだが。

「あ、いや」

一瞬訂正しかけて言葉を飲み込む。今はそんな話をする時ではない。

そうこうしている間に、いつの間にか、静香はぴつたりとしたライダースーツのような衣装をまとつた身体をまるで体操選手のように使いためらいなくトランポリンの上へ落ちていった。

次に君影が静香を見たのは、多喜に抱きかかえられ、セットの上まで飛び上がり、舞台上の滑り台状になつたセットを滑り降りてくる様だった。

多喜がボディーガードみたいだな、と君影は思った。

案の定、多喜に事情を耳打ちされた静香はこう言った。

「映画のタイトルは『ボディーガードはサイボーグ』、春日多喜のお姫様は一般公募ですので、ふるってご応募くださいね」

確かに、多喜の運動神経は人間の範疇から逸脱している。しかし、ひょうたんから駒とはこのことだ…と君影はどつと疲れを感じ

た。

「やっと終わった…」

自室のバスルームで以前ルイから貰ったアロマオイルを湯船に適当に垂らす。

君影は、はあというため息とともに湯船に腰掛けた。

充滿する湯気にアロマオイルの香りが頭の奥の疲れをほぐしていく。

式典に遊園地内でのアトラクション取材それからレセプション、ただそれだけの予定だったのだが、余計なことが多すぎた。

シュティの不可解な打ち合わせ、静香のヘリコプター事故、あわや式典は中止かと思われたが、シュティの機転により表向きには式典は無事に終わった。

無事に終わってみると、なぜあんなことになったんだろうと気になりはしたものの、無事に終わった安堵感が強過ぎて頭の中で情報が整理できない。

（なんだか、変なパンダの着ぐるみもいたしな〜）

式典会場でぶつかったパンダの着ぐるみ。

（会場に遊園地側のスタッフって入れたっけか）

式典の打ち合わせの時に、スタッフの入場制限についても聞いた気がするのだが、もう忘れた。

思ったより疲労しているのを君影は感じた。

「考えても無駄無駄、頭ハゲちまわ〜」

君影の携帯電話がちゃかちゃかと鳴った。マネージャーからだ。

「はいはい、どしたんすか〜？」

湯船に浸かりつつも着信に応じる。

『お、お休みのところ、す、すみません！ 君影くん、静香さんよ、上の会議室へ来るように、い、言われまして』

「皆は？」

『シュ、シュティちゃんとルイさんは、お、お揃いになっています。』

ほ、他の方々にも連絡したので直にいらっしやるかと……』

「はいはい、じゃあ、俺も行くわ」

返事の最後はあくびになりながら通話終了ボタンを押すと、手早く着替え会議室へ向かった。

会議室のドアを開けると何かが頭の上へ降ってきた。

「うわっ、何だ？」

「やった、でかしたシュティ上手く頭に挿さったで」

志智がガッツポーズをする。

「これはまた、見事に挿さりましたね」

ルイが苦笑する。

「君影の背だと大して速度が出ないから挿さるかどうかわかんかったけど、うまくいったね」

手に白い風車を握っていたシュティはどことなく興味がなさげな口調で言った。

多喜は無表情に拍手をしている。

「犯人はお前か志智！」

各々の反応で犯人を特定した君影は志智に詰め寄る。

「あはは〜！ 扉開ける時の無防備さを戒めんのや！」

「志智も引つかかったんだけだね〜」

シュティがニコニコと言う。

「結局、多喜と志智と君影のうち多喜だけが避けられたね、ルイ」

「そうですね、賭けは私の勝ちですね」

にこっとルイが笑いながら言う。

「うーん、君影は避けるかなって思ってたんだけどな。意外と鈍い？」

「お前らが黒幕か！」

君影は志智に詰め寄ったままシュティとルイの方へ顔を向けた。

「黒幕だなんて言いがかりだよ君影、純粹にボクが犯人。ルイは幫助くらいかな。犯人っぽい仕草の人が犯人だとは限らないよね。も

う少し冷静に状況を分析しないとさ、ホームズにはなれないなあ残念」

シュティはさも残念そうな悲しそうな顔を作った。

「何が残念だ、開き直ってんじゃねーよ、ルイだって賭けに乗ってんだから幫助じゃねーよ共犯だっつの」

「まあまあ、そんないきり立たんでもええやん、頭の風車取って椅子に座ろうや君くん」

志智が君影をなだめる。

「何、そんなもんが!？」

君影はあわてて、頭をさぐり風車を取る。

白い紙で作られた風車が、割り箸頂点に地面と平行になるように画鋏で留められていた。

「何だこれ、風車って普通こんな留め方しねーだろ」

君影は、画鋏で留められている風車を割り箸の側面につけ直した。

「うん、別に風車を作りたかったわけじゃなかったけど、あるものでちょっと試したかったただだから」

シュティがぼつりと言った。

「何を？」

「ヘリの事故について」

「何か分かったのか！」

君影がシュティに勢い良く問う。

「今日は島の稼働の仕上げの日のはずなのに、全体的にすっきりしない日でしたよね」

シュティは急に口調を改め、君影の勢いを殺すかのように唐突な話題転換をした。

「お…、おう」

君影はシュティの言うことへは同意なのだが、戸惑いつつ返事をした。

志智も多喜もそれぞれに思い当たる節があるので、黙ってうなずいた。

シュティの急な打ち合わせ、着ぐるみのパンダ目撃、舞台監督の堀の言動、仕上げはヘリの事故、それらがなければ今朝のすつきりとした気分のままで今日が終われたはずなのだ。

「ヘリの事故の実験に風車はなんの役にも立ちませんでした、手持ち無沙汰で始めたことだったので問題はないんですけれどもね」

シュティの口調が明るくなった。

「何か分かるも何も、ルイから話を聞くといいですよ、凄く素敵なニュースが聞けます」

急に話しを振られたルイは、困ったような微笑みを浮かべた。

「簡潔に言つと…」

ルイの言葉に君影、志智、多喜の三人は息をのむ。

「殺されかけました」

「何やの、その素敵すぎるニュースは…」

「簡潔すぎだろ…おい」

「聞きたくなかった…」

今日の式典をフオーローするために全力を尽くしてしまつた志智、君影、多喜が三人三様に疲れきつた口調で驚きを口にした。

「つまり、何、事故じゃなくてルイとお嬢の殺人未遂事件ってことなんやな」

いち早く立ち直つた志智がルイとシュティを交互に見比べながら確認した。

「主に静香さんの殺人未遂で、僕は多分巻き添えだと思っています」

やんわりとした口調でルイが答える。

そういう問題ちゃうわとすぐさま志智に突っ込まれた。

「じゃあ、今呼ばれてるのは、口からでまかせ多喜主演の映画制作をどうするか会議じゃなくて、安全対策会議なのか」

どこか合点がいった口調で君影も確認した。

シュティはそれに対してはさあと肩をすくめただけだった。シュティも知らないようだった。

君影はこめかみと目頭を順番に指先でマッサージしながら喋る。

「確かに、事故というだけじゃスツキリしなかったけど……。で、ちゃんと心当たりはあるんだろうな？」

「ありすぎて困っちゃうのよね」

急に女性の声が会話に割って入った。

「今日は一日お疲れさまね、もうちよつとつきあってもらうわよ」
後から入って来たらしい静香は、会議室の扉に相對するように、一番遠い席に座った。

「で、結局俺たちどうすりやいいわけ？　どのみちもう映画撮影だつてごまかしちゃったんだし警察にや届けないんだろ？」

今までの会話の流れを崩さず君影があげすけな物言いで静香に言った。

「そうね」

と静香は前置きして喋り始めた。

「映画の撮影で済ませたのは正解だったわね、機転が良く利いてたわ褒めてあげる。ただし、それくらいの能力を見込んでスカウトして育てたんだから当然といえば当然の結果よね」

「誰も褒めてくれたなんて言ってるねえよ、俺たちお嬢の何でも屋兼広報なんだからよ。お嬢の命令なら地球だって守っちゃいますってか」

君影以外の四人は「ないない」と首を振る。

「地球なんかは守らなくてもいいけど、私の島は守ってよね」

嬉しそうに静香は続ける。

「大きなことをやれば、大きな声で意見の違う誰かに気に入らないって言われるし、小さなことをやれば、やっぱり意見の違う誰かに小さい声で気に入らないって言われるし、その言い方が、どんな風に現れるかっていう、それだけの違いだわ。

今回は、どうしても島の運営を大々的にやってほしくないって、そう言っただけで来たんでしょうね、前々からいるのよ、研究をやめろって言うてくる奴が。

別に、研究がしたくて島買ったわけじゃないから止めてもいいん

だけれど、情報っていい商品になるんだものね、特に炭素と食料系って。だから止めるなんて考えられないわ」

静香は長い睫毛に囲まれた目を心底楽しそうに細めた。

「だから、あなた方に頑張ってもらうしかないわけ。きっと楽しいことになるわよ」

やな話を聞いたと言わんばかりの顔で君影は舌打ちをした。

Critical condition - 01 - (後書き)

全体の三分の一くらいまで話が進みました。

これからの部分は元々あるプロットを少し変えてアップしていくので、

更新が遅くなると思われます。

コメントナサイ；

Critical condition - 02 - (前書き)

6 / 8 更新

走っている車は急には止まれないのと同じように、走り出した計画はそう簡単には止められない。

しかも、最終段階に来たようなプロジェクトならなおさらだ。引き返すことなんて出来ない。

たとえ、その中心にいる静香が死んだとしても…。

静香はある程度そんな妨害が、アメーzingランドの営業開始に合わせて起こるということは覚悟していたんだろう、君影は今更ながら実感した。

静香は、君影たち観光を宣伝するためだけのタレントに対して、まるで要人警護を担当する警察官や自衛隊員のような訓練を施したスカウトしたのもまるで無名のタレントともいえないような人間ばかり。

（ああ、そうか。むしろ逆なのか）

妨害する奴らが特定出来ないのなら、妨害し易そうなポイントをわざと作ったのか。だから、そのポイントに関係する人間の方を対処出来るように鍛えたのだ。

（つまり、まだまだこれから何かが起こるってことか）

アメーzingランドの営業開始に合わせて、他にもイベントがある。

近傍にあるホールのこけら落としとなる、君影の単独ライブに五人全員が出るイオフロート内で開発された新素材を使ったファッションショーがそれだ。

（名実ともに芸能人ですって言えるようになるには、今回のこけら落としを無事に乗り切ってからなんだな）

鼻をつくツンとした匂いで君影は素に戻った。

自分のソロライブのゲネプロ中だった。

今はステージの上にいる。

真新しいステージは何もかもが新しく、どこかペンキのような匂いがしていたのだが、急激にツンときて涙が出そうになった。そして咳き込む。

「ちょ、ちょっとごめん！　なんか変だ！　急にツンと来た！」

咳き込みつつも片手を上げて合図をしながら言った。

なおも咳き込みながら君影はステージ中央から下手の舞台袖に駆け込んだ。

袖に待機していたスタッフの一人が君影にタオルを手渡し、君影はそれを受け取ると咳が収まるまでしばらく待った。

「ねえ、スモーク炊き過ぎじゃない？」

君影は回りに問う。

「いえ、今はスモークマシン止めてますよ」

スタッフが返事をした。

「マジで？　なんかコゲっぽい感じだったけど……。まさか袖幕が照明に当たっててコゲてたりとかしてねえ？」

冗談めかして言いながら、君影はタオルを返す。

「止めてごめん、戻る！」

君影が袖から出て立ち位置に向かいかけた瞬間、バチバチっと音がしてあたりが真っ暗になった。

「停電だ！」

ざわめくスタッフの声。

暗闇の中で、舞台上の蓄光テープだけが浮かび上がっている。ボンツ

と、もの凄い音がした。

舞台の客席の方からのように感じた。

「何だ！？」

誰かが声を上げる。

君影は音のした方向へ目を向けると、暗闇の中に光とその当たりが灰色つぼくなっているのを見つけた。

「誰か消火器持ってこい！ それと懐中電灯！」

君影は叫んだ。

よく段々暗闇に目が慣れてくると、燃えている場所が舞台の丁度一番客席側のあたりだということが見えた。そこにあつたのは、モニターだったはず。

（モニターが爆発した？ こんな新しい設備で電気火災？）

「火事！？」

誰かがまた叫んだのを皮切りに「え！？」「火事！？」「どうして！？」などといった驚きがひしめく。

パニックになるいやな予感に、君影は消火に動こうとしたが、火の向こうになにか熊のような影が見えた。

（パンダの着ぐるみ野郎か？ あいつやっぱり犯人なのか！）

直感的にパンダの着ぐるみだと確信した君影は走り出した。

「スプリングラー何で作動しないの？」

「火報切ってます！」

「水はダメだ水は！」

「きゃっ」

走り出した君影は、懐中電灯を持ってわたわたとしているスタッフにぶつかった。目はパンダの着ぐるみをとらえたままだ。

「ごめん！ ちょっとどいて！」

数秒でパニックに陥ったスタッフに阻まれてパンダの着ぐるみが追えない。パンダの着ぐるみは君影の視界の中で奇妙な動きをしていた。

大きな箱を抱えて火のあたりをうかがいながらウロウロとしている。

（まだ何かするつもりなのか？）

パンダの着ぐるみは箱を抱えて火を中心に左右にウロウロとしながらも近づいていた。だんだんと、パンダの着ぐるみだと

いうことがはつきりしてくる。

「なんで！？　なんでこんなに燃えてるの！」

「バカ！　消火器ってこい！　感電するぞ！　プラグ関係全部抜け！」

「119番連絡は！？　電気火災だって伝える！」

「連絡しました！」

火へだんだんと近づいていったパンダの着ぐるみが、突然飛び上がったかと思うと、箱を置き視界から消えた。

「煙に巻かれたら死ぬぞ！」

「懐中電灯！」

「電源全部落として避難！」

君影はパンダの着ぐるみが視界から突然いなくなり「え？」と思ったが、すぐに逃げたのだと思い負追おうとした。

（こんな時に多喜が入ればなあ）

一昨日に多喜がパンダの着ぐるみを見かけた時に後を追わせていたらこんな事態にならなかったのだろうか？　と、君影に一抹の後悔がよぎったが、混乱した中で火が消える気配がない。君影は「チツ」と舌打ちをすると、パンダの着ぐるみを諦めて消火器を取りに行こうと、火に背を向けた。

「火が！」

誰かが言っただのを聞き、振り返る。

「消えた！」

また、誰かが言った。

君影の目の前で、誰かが消火器を火に向けていた。

が、その服装が問題だった。

（チャイナ服？）

火が消えるまでの一瞬だったが、君影の目にはおかつぱ頭のチャイナ服の女が焼き付いた。

絶対にスタッフではない。

「誰だよアイツ！」

また、得体の知れない不審人物の登場だ。
パンダの着ぐるみにチャイナ服の女…。

「あいつら絶対グルだ！」

畜生！ と君影は叫んでいた。

Critical condition - 02 - (後書き)

某サイトでiPad向けの電子書籍無料配布企画に参加しましたが、公開されるかどうか分からないので、PDFにして配布します。

ご興味がありましたら、パソコンからダウンロードしてってください。

(h) <http://iolnet.sakura.ne.jp/dl/ioldokuhon.pdf>

時間軸としては5人が初顔合わせするくらいの時間軸で、君影スカウト、シュティスカウト、初顔合わせ(漫画)、志智視点で地獄のオリエンテーリングの始まり 4本のショートショートが読むことが出来ます。

Critical condition - 03 - (前書き)

6 / 9 更新

キャラクターの設定書を見ていたら、今日（6 / 9）は君影の誕生日でした。

さてなぞなぞです、なぜ今日が君影の誕生日に設定されたのでしょうか？

ヒントは「ミュージシャン」答えは後書きにて！

20

（何なんだよ、あのパンダの着ぐるみと、中国服の女はよ！ 畜生、畜生！）

騒ぎの中で目に焼き付いた光景に君影は奥歯をぎりつと噛み締める。

本番が終わるまでの間に何かが起こるかもしれないと予測はしていたのに、捕まえられなかったのが悔しくてしょうがないのだ。
「君くん襲われたんやってえ？ アホみたいに運が良かったらしいやん。一歩間違ったらあの世行きて、馬鹿は運がいいってホントなんやなあ」

けたたましい声が会議室のドアからやってきた。本人を確認するまでもなく志智だと君影は思った。

「『馬鹿は風邪ひかない』だろうが！ 運と馬鹿は関係ねーよ。つか、高学歴様は馬鹿じゃないからこんな時はあつさりあの世行きてっ！ことだな御愁傷様！ 残念賞またどうぞ！」

志智の言う通り「アホみたいに運が良かった」というのは本当で、あの時鼻にツンとくるような臭いに気がつかなかったらどうなっていたか分からない。良くて全身火傷、悪くて死……。どのみち人前には出られないことになっていたはずだ。

しかし、何かが起こるかもしれないと予測していたからこそ、「何か変だな」と思った時に安全側に身体が動いた。

「高学歴で爽やかなおれはね、佳人薄命って言葉が似合っちゃうよ。うなイケメンなの、人生ケ・セラセラなの」

「意味わかんねえよ！ 佳人薄命とケ・セラセラになんの関係があるのか！0文字以内で答えるよ！ ああ？高学歴さんよお」

「『なんにもかんけいない』！ 丁度10文字や、アホめ！」

「アホはどっちだ馬鹿め、それだと句読点の『。』が入ってねえだろうがよ、馬鹿が！」

「問題文に句読点含むって書いてなかったやないか。やっぱりまだまだ頭足りないちゃんなんやね君くんは！」

「お前こそ、全部ひらがなで答えちゃうあたり小学生かつつの」

「きいゝつ、なんやごつつむかつくわねこの子！」

「あ、あ、あ、あの二人とも落ち着いて・・・ケンカはやめて・・・」

「マネージャーがおろおろと割って入ろうとするが、けんか腰の君影と志智の勢いに負けてしまう。」

「現場を見せて貰いましたけど」

そこにシュティが会議室へ到着した。ルイと多喜も一緒だ。

マネージャーは茶を用意するためという口実でそそくさと付属のパントリーへ引っ込んだ。

シュティは君影と志智の険悪な雰囲気には慣れっこになっていたので構わず続ける。

「本来ならモニターの下にないはずのナイロンとアセテートがあったので何か仕掛けが施されていたようです」

「仕掛けって？」

君影はおうむ返しに尋ねる。

「さあ、詳しいことは分かりません。君影がツンとした臭いと言っていたのは多分アセテートが燃えた臭いじゃないかと思われます」

シュティは首を傾けて答えた。

「そうなのか、ツンときてなんか臭い感じだった」

丁度、お茶の用意が出来たのか、マネージャーがそれぞれのお茶を用意して配る。その様子をシュティは目で追っているのを感じて君影もつられてマネージャーの黒いスタッフジャンパーの背中を見守った。

「ナイロンが燃えても異臭がしますから、臭かったのはそのせいかも知れませぬ」

「そのおかげでオレ助かったのか…」

マネージャーは君影のライブのゲネプロを見ていたので、そのスタッフジャンパーをずっと着たままだったようだ。

各自お茶が配られると無言で口をつけた。

シユティはお茶に手を付けずにマネージャーに声を掛けた。

「マネージャー、ジャンパーの下なんか黒いですけれどもどうしたんですか？」

突然声をかけられてビクとなったマネージャーは「そ、そんなんですか!？」とあたふたパントリーへ駆け込む。

「あはは、マネージャーおちよこちよいやな」

マネージャーのいつものオドオドとした態度にその場が和んだ。

「でもさ、手口は分かんなくてもさ、犯人は分かったぜ？」

「誰だれ？」

マネージャーのおかげで場の空気が変わったので、君影は落ち着いて切り出した。

「パンダの着ぐるみ、それから中国服の女がいたんだ」

「パンダの着ぐるみ…また出たんだ」

多喜がパンダの着ぐるみに反応した。

「おうよ、箱持ってウロウロしてたんだぜ、あつやしーのな」

君影は爆発が起こった後のことを手短かに語って聞かせた。

「しかしそれだと中国服の人、火いつけたのに消火活動してるやんな、ウケるけど」

「燃えた現場の近くには、消火器が何本かと、ドライアイスの箱が残されていましたので。君影が見たことと痕跡は一致しています」

なので、何かしらの理由で消火活動をしていたというのは間違いないようです。

「パンダの持ってた箱がドライアイスの箱だったんかな？」

「君影の証言通りなら、おそらくは」

「ドライアイスをぶちまけて火い消したかったんやな」

「おそらくは…」

「ドライアイスの箱を探すより消火器を探した方が早いと思いますけどね」

ルイが珍しく苦笑した顔をした。

「どうしたんやルイ」

「犯人なのかも知れないですが、その慌てふためいている様に一種の愛らしさを感じてしまつて…。爆発の規模から感じられる確実に殺そうという冷徹な意思とはそぐあわない気がしたんです。それに、変装とはいえそんなに目立つ格好をしているのなら、監視カメラの映像からすぐにどこの誰だか分かりそうな気がしませんか」

「着替える前と着替えた後がどこかに写っていそうだなもんな」
なるほど、と君影は思った。

Critical condition - 03 - (後書き)

答え

6月9日はロクとキューで「ロツクの日」だからです。(くだ
らん…)

ハイ！ お後がよろしいようで！ また次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727/>

I.O.Lデビューキャンペーンは危険が一杯！？

2010年10月8日14時04分発行